

清末留日学生刊行諸雑誌の 流通ルートにみえる在日華僑について

清末留日学生所刊諸誌於流通途径上之留日華僑

On Overseas Chinese in the Circulation of Magazines
Published by Chinese Students in Meiji Japan

松 本 武 彦

Takehiko Matsumoto

摘 要

如孫中山之1923年12月，於広州向国民党員之演講，對於革命運動而言，宣傳其理念・方法，實為重要之舉。

本稿為検討同盟会結成之前後，留日学生所刊諸誌，於流通途径涉及留日華僑之問題。

根據張静廬『中国近代出版史料』可知，至1911年為止，所刊新聞數為：中国国内34種，外国33種。雜誌數為：国内18種，外国31種；其間刊行於東京者24種。1905年以前刊行之雜誌中，於留日華僑之間，可確認其流通途径者計10種。由此等關係觀之，可略分為：1901年以前依據清議報之流徑而刊者以及1902年以後所刊者兩系統。横浜華僑廖翼朋於後者之流徑上，誠居功尤彰。其与孫中山之關係極為親密，亦為三合会之會員。

1. はじめに

第1次国共合作成立直前の1923年12月30日，孫文は広州での国民党員に対する演説で，国家建設にとって重要なのは，軍事力よりも主義の宣傳であると述べた¹⁾。清朝を打倒した後軍事優先が続いて来たが，それ以前は宣傳が重視されており，ほかならぬ武昌蜂起自体が，表面的には軍事的成功に見えるが実は宣傳活動の成果であったとし，武昌蜂起＝清朝の打倒以前の，宣傳に重点を置く革命方法をとるもどさねばならない，と訴えることでこの演説は始められている。

思想や主義・理念といったものの伝播する度合は，それ自体がどれほど理論的整合性を持っているかと同時に，想定される受容者へのはたらきかけの強弱に左右される。そもそもいかに崇高・高邁・完全な理論も，それを多くの人々（階層・階級）に対して発信し，いわば社会的検証を受けることがなければ，俗世を離れると称してその実高踏趣味の泥路に迷い込んだ隠者

のつぶやきにすぎない。

1905年の中国同盟会結成にあたって重要な役割をはたした留日学生達は、当時の在日中国人の中でのもう一つの緊要な勢力であった華僑達と、いかなる関係にあったのだろうか。このことを考える手懸りとして、本稿は、留日学生による活動が昂揚したことの証左と理解できる種々の出版物、特に、奥付等によってその流通ルートを知り得る雑誌類の刊行に、在日華僑がいかにかかわったかを、同盟会結成前後の時期を中心として検討する。

2. 革命宣伝活動——量的推移——

1911年の革命、即ち武昌蜂起に端を発する諸情勢によって清朝が滅亡した狭義の辛亥革命以前に、中国の内外で発刊された新聞や雑誌について、『中国近代出版史料』²⁾は馮自由の記すところに依拠し、それらの名称・刊行年・刊行地・編集及発行人を紹介している。ここでは、まず、以下に新聞と雑誌の名称・刊行年・刊行地を列挙して、行論の展開に資することとした。

中国日報	1899年	香港
同文滬報	1900年	上海
大同日報	1902年	サンフランシスコ
台南日報	同上	台湾
蘇報	同上	上海
世界公益報	1903年	香港
国民日日報	同上	上海
檀山新報	同上	ハワイ
女蘇報	同上	上海
萃新報	同上	金華
白話報	同上	杭州
鷺江日報	同上	厦門
閩南日報	1904年	シンガポール
俄事警聞	同上	上海
警鐘日報	同上	上海
広東日報	同上	香港
華暹新報	1905年	バンコク
南洋総匯報	同上	シンガポール
有所謂報	同上	香港
群報	同上	広州
民生日報	1906年	ハワイ
東方報	同上	香港
仰光新報	同上	ラングーン
少年報	1907年	香港

清末留日学生刊行諸雑誌の
流通ルートにみえる在日華僑について

中興日報	1907年	シンガポール
華英日報	同 上	バンクーバー
光華日報	同 上	ペナン
中華新報	同 上	汕頭
警東新報	同 上	メルボルン
自由新報	同 上	ハワイ
神州日報	同 上	上海
大声報	同 上	ハワイ
星洲晨報	1908年	シンガポール
日華新報	同 上	東京
泗浜日報	同 上	スラバヤ
光華報	同 上	ラングーン
黔報	同 上	貴陽
蘇門答臘報	同 上	バラワンデリー
民鐸報	同 上	スラバヤ
民呼日報	同 上	上海
民吁日報	1909年	上海
国民報	同 上	広州
長春日報	同 上	長春
中国公報	同 上	上海
帝国日報	同 上	北京
大漢日報	1910年	バンクーバー
進化報	同 上	ラングーン
少年中国報	同 上	サンフランシスコ
民醒報	同 上	リマ
民立報	同 上	上海
西南日報	同 上	貴陽
民国日報	同 上	シドニー
商務日報	同 上	漢口
南越報	1911年	広州
人權報	同 上	広州
平民報	同 上	広州
天民報	同 上	広州
軍国民報	同 上	広州
齊民報	同 上	広州
中原報	同 上	広州
可報	同 上	広州
南僑日報	同 上	シンガポール
国風報	同 上	北京
国光新聞	同 上	北京

公理報	1911年	フィリピン
大江日報	同上	漢口
天鐸報	同上	上海 ³⁾
以上、新聞67タイトル。		
中国旬報	1899年	香港
訳書彙編	1900年	東京
開智録	同上	横浜
国民報	1901年	東京
大陸報	1902年	上海
湖北学生界	同上	東京
新民叢報	同上	横浜
浙江潮	1903年	東京
江蘇	同上	東京
湖南遊学訳編	同上	東京
女学報	同上	上海
童子世界	同上	上海
覚民	同上	松江
中国白話報	同上	上海
女子世界	同上	上海
旧学	同上	東京
二十世紀大舞台	1904年	上海
漢声	同上	東京
揚子江叢報	同上	上海
揚子江白話報	同上	上海
女子魂	同上	東京
二十世紀之支那	1905年	東京
民報	同上	東京
時事画報	同上	広州
復報	1906年	東京
鵑声	同上	東京
雲南	同上	東京
洞庭波	同上	東京
競業旬報	同上	上海
直言	同上	東京
中国女報	同上	上海
中国新女界	同上	東京
国粹学報	同上	上海
新世紀報	同上	パリ
天討	1907年	東京
晋声	同上	東京

清末留日学生刊行諸雑誌の
流通ルートにみえる在日華僑について

天義報	1907年	東京
漢幟	同上	東京
大江報	同上	東京
醒獅	同上	東京
神州女報	同上	上海
四川	同上	東京
華鐸報	1909年	ジャカルタ
時事画報復刊	同上	香港
南報	1910年	桂林
民声叢報	同上	上海
少年学社旬刊	同上	サンフランシスコ
平民画報	1911年	広州
南風報	同上	桂林 ⁴⁾

以上、雑誌49タイトル。新聞・雑誌それぞれについて刊行地別⁵⁾に整理すると、表1から表4の如くなる。新聞の場合、中国国内34、国外33でほぼ同数。雑誌は国内18、国外31であり、特に東京が24とおよそ半数を占め、留日学生の活動が、この時期の革命運動、とりわけ啓蒙的活動の中で高い比率を占めていたことがうかがわれる。さらに刊行年別にみると表5のようにまとめられる。1903年前後と1906・7年にピークがあり、1908・9年には低調期をむかえるが、その後1911年に向けて上昇傾向に転じている。

刊行地名	刊行数
上海	12
広州	10
北京	3
貴陽	2
漢口	2
厦門	1
長春	1
杭州	1
金華	1
汕頭	1
合計	34

表1 新聞刊行地及び
刊行タイトル数(国内)

刊行地名	刊行数
香港	6
シンガポール	5
ハワイ	4
ラングーン	3
バンクーバー	2
サンフランシスコ	2
スラバヤ	2
バンコク	1
東京	1
台湾	1
メルボルン	1
ペナン	1
リマ	1
フィリピン	1
バラワンデリー	1
シドニー	1
合計	33

表2 新聞刊行地及び刊行
タイトル数(国外)

刊行地名	刊行数
上海	13
広州	2
桂林	2
松江	1
合計	18

表3 雑誌刊行地及び
刊行タイトル数(国内)

刊行地名	刊行数
東 京	24
香 港	2
横 浜	2
ジャカルタ	1
サンフランシスコ	1
パ リ	1
合 計	31

表4 雑誌刊行地及び刊行
タイトル数(国外)

刊行年	新聞刊行数	雑誌刊行数
1899年	1	1
1900	1	2
1901	0	1
1902	3	3
1903	7	9
1904	4	5
1905	4	3
1906	3	10
1907	9	8
1908	8	0
1909	5	2
1910	8	3
1911	14	2
合 計	67	49

表5 刊行年別刊行タイトル数

3. 雑誌流通ルート上の在日華僑

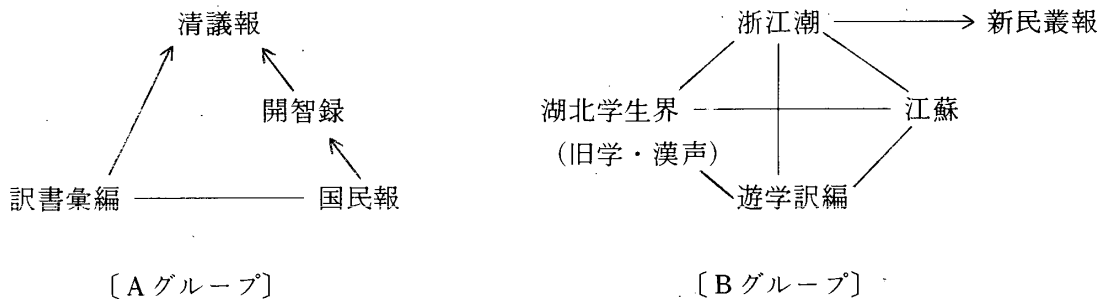
1900年から1905年頃までは、留学生による出版活動の揺籃期である。より簡便に出版物を流通させるため、同じ中国人である華僑が留学生達の注意を引いたであろうことは、容易に想像できる。既に見た通り、1911年以前に海外で刊行された雑誌は31タイトルある。このうち1905年以前に出されたものは、8割近くの24タイトルを数える。この24の雑誌のうち、筆者が記事内容等を確認し得たものは、影印本であったりバックナンバーの一部分のみであったりするものをも含め13。さらに、このうち流通ルートに在日華僑(と思われるもの)が存在したことを確認できたのは、次の各誌である。即ち、『訳書彙編』⁶⁾・『国民報』⁷⁾・『湖北学生界』⁸⁾・『新民叢報』⁹⁾・『浙江潮』¹⁰⁾・『江蘇』¹¹⁾・『遊学訳編』¹²⁾・『旧学』¹³⁾・『漢声』¹⁴⁾・『民報』¹⁵⁾。それぞれの流通ルートにかかわる記述内容は次の通り。

訳書彙編	代派所	横浜山下町253清議報館・大阪川口32益源號・神戸栄町3丁目中外合衆保險公司 ¹⁶⁾
国民報	代派所	横浜山下町253開智会・大阪川口32益源號・神戸栄町3丁目中外合衆保險公司
湖北学生界	代派所	横浜山下町240廖振華號
新民叢報	発行者	馮紫珊
	印刷者	陳侶笙
浙江潮	代派所	横浜山下町152新民叢報館・山下町240廖振華號
江蘇 ¹⁷⁾	代派所	横浜山下町240振華方廖冀朋・神戸北長狭通3丁目番外17陳毅卿
遊学訳編 ¹⁸⁾	代派所	横浜山下町240振華方廖冀朋・神戸北長狭通3丁目番外17陳毅

卿

	招待所	神戸益源號孫実甫 ^卿
旧学 ¹⁹⁾	代派所	湖北学生界に同じ
漢声 ²⁰⁾	代派所	湖北学生界に同じ
民報	代派所	東京三崎町（山下町80）譚発洋服店・東京古今図書局・横浜永新祥

以上の代派所等の関係に、既に指摘されている開智録と清議報の流通ルートの重なり合い²¹⁾を考慮すれば、次の二つの図の如き流通ルートのネットワークが確認できる。図中の矢印は、矢の起点の雑誌が終点の雑誌を代派所としていることを、また、矢印のない実線は、線の両端の雑誌が同一の代派所を持つことを示す。たとえば、訳書彙編は、清議報を代派所としている一方で、国民報が持つ代派所のうち、大阪の益源號と神戸の中外合衆保険公司とが共通している。図に示したように、仮りに清議報・訳書彙編等のひとまとまりをAグループ、浙江潮・新民叢報等のひとまとまりをBグループとすると、Aグループはすべて1901年以前に刊行され始めた雑誌であり、グループ内の関係は、清議報を中核としている点にすぐ気づく。一方、Bグループは、1902年以降に発行されたものであり、改良派の雑誌新民叢報を別にすれば、すべて横浜の廖振華號を代派所としている。従って、廖を中核とする流通ルートを形成していたと言えよう。さらに、2つのグループに整然と分けられることからわかるように、両グループの間には、流通ルートの面で重なり合いがない。また、同盟会の機関誌民報との間にも、両グループとも代派所の関係を持たぬことも注目される。



横浜の廖振華號とは、廖翼朋なる横浜在住中国人商人の経営する商店である²²⁾。彼は、孫文と同じ時期に広州の博濟医院に在籍していたことがあり、1903年には三合会会員となった²³⁾。振華號は、三合会の会所として使われた²⁴⁾。横浜では孫文と同居していた時期があり、孫文と他の同志との連絡員の立場にもあった²⁵⁾。さらに、大同学校の運営をめぐって革命派と改良派が対立した時には、中和堂会員として改良派と対決した人物の一人である²⁶⁾。

4. 小結

1901年以前即ち留学生による出版活動の初期の段階において、清議報の存在が重要なものであった点は、改良派の活動が革命派のそれに比して優位にあった時期に重なり、開智録の場合について知られている、反満を主題とする激烈な主張が改良派の宣伝ルートを使って行われて

いたという事実は、ただ単に開智録のみに固有なことではなかった。興中会における革命運動が改良派の保皇会結成によって、主要な構成員たる華僑をうばわれ沈滞したことはよく知られた事実であるが、そのような時期に、既に見た孫文と密接な関係を持つ廖翼朋の如き人物が留日学生の出版活動の流通面における中核にいたことは、革命派が、運動の停滞期をいかにして乗り切ったかを我々に教えてくれると同時に、留学生・知識人が結集して成立したとされる中国同盟会が、どのような方法をもって準備されたかをも示している。

本稿においては、清末に留日学生が刊行した諸雑誌にみい出せる在日華僑を摘出し、若干の初歩的検討を行った。流通ルート等について確認し得た雑誌が少なく、今後さらに確認済みの雑誌をふやして再検討することとしたい。

註

- 1) 「在広州対国民党員演説」『孫中山全集』第8巻、中山大学歴史系孫中山研究室等編、中華書局、1986年、565頁～578頁。
- 2) 張静廬『中国近代出版史料』第2編、群聯出版社、1954年。
- 3) 同前、276頁～283頁。
- 4) 同前、283頁～287頁。
- 5) 刊行地名は、国名と都市名が混在しているが、とりあえず刊行地域の区分が明らかとなるのでそのままとした。
- 6) 吳相湘主編（中国史学叢書）、学生書局、1期・2期・7期・8期。
- 7) 天理図書館所蔵、1期。
- 8) 羅家倫主編（中華民国史料叢編）、中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会、1期～5期。
- 9) 芸文印書館、1号～96号。
- 10) 1期～10期（影印本）
- 11) 前掲、羅家倫主編、1期～12期。
- 12) 同前、1期～12期。
- 13) 東洋文庫所蔵、1冊（号数記載なし）。
- 14) 前掲、羅家倫主編、3冊（号数記載なし、ただし湖北学生界としては通巻6期～8期）。
- 15) 科学出版社、1号～26号。
- 16) 同所については、在日華僑経営の会社と速断できないが、買弁として華僑が存在した可能性を否定しきれないので、とりあえず挙げておく。
- 17) 本誌は、上海明権社を「総経售所」とし、その明権社の「分售所」として廖並びに陳方が挙がっている。
- 18) 『江蘇』第6期に載った本誌の広告によれば、総発行所として前出の明権社の名が挙がっており、『江蘇』と同じ流通ルートを持っていたと考えてさしつかえなからう。
- 19) 本誌は『湖北学生界』の増刊号であり、同誌第5期に、同じ流通ルートである旨記述されている。
- 20) 本誌は『湖北学生界』が第6期より改題したものである。
- 21) 馮自由『革命逸史』初集、商務印書館、1939年、142頁。黄珍吾『華僑与中国革命』国

清末留日学生刊行諸雑誌の
流通ルートにみえる在日華僑について

防研究院・中国文化研究所，1963年，84頁。寧樹藩・陳匡時「評『開智録』」『復旦学報（社会科学版）』1984年第3期，1984年5月。

22) 馮自由『中国革命運動二十六年組織史』商務印書館，1948年，75頁。

23) 馮自由『革命逸史』第3集，商務印書館，1965年，3頁。

24) 馮自由『華僑革命開国史』商務印書館，1946年，48頁。

25) 同前。

26) 同前，43頁。

補) 拙稿「中国ブルジョア革命運動と一甲州人」（未発表，投稿中）参照。